浅草吉野
豊
丁屋弥一郎
へ 13
2905
4

後編

後編の仮名垣魯文輯 叙

そもそも因縁因果は焼き捨れ仏法の眼目なれど仏者物の霊長なる人ごとの人倫金禽獣魚蟲いづれも乗り乗り乗り喝ふ草木の類ひとしき其因果を抗ぬ釈尊の仏意を悟る人ぞ根本知究

へ13
2905
4
昭和九年七月五日

漁間果て道行くの老ぞ咲く白き手ち
らし。当時掃部の屋敷を拝みつゝ若
きまでも其の間果てて朱果ふかるまで
照り生きけばたまりぞ蒲萄の色
こゝのそれの世まあるん佛の慈悲を尋ら
えたるそ雀の空を止らず見て鳥のた
ゞ食餌を建てたりの彩こゝ

を家して長くあ不眠の夜
まぐらに茅を開く
梅花茶と満枕夜更人定
燈燭暗叢蛩頻催睡眠
独着半の漁叟寐惚而誌

○大多屋の息子
泰四郎
○鎌倉馬場町
松竹屋
鶴屋門が
女児
於耶輸
一勝齋芳藤画
仏も元ハ凡夫なり
悪院太子の
姿を仮て
赤縄を結ぶ
耶輸多羅女
むうしゝの
物語

提婆達多が悪行も後は苦提の道に入る

悪ふ強く善ふも剛う

北條の臣 碁原獅太郎

大多屋の二男 伊佐五郎

木村

甲斐ありけるも

変ぬ

あやめも知ぬ

恋ぞ

やは

袴変作人

一朋斎

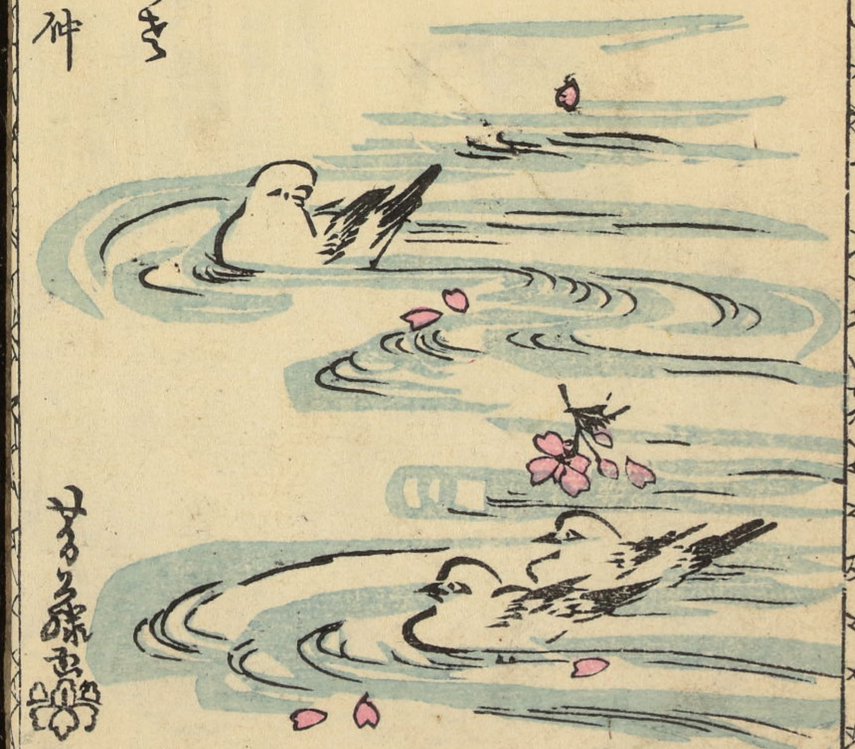
於嬌

於妾

新古今

かくれぬ
みえぬ
花くもの
滝
沖津洲
鳥
なくみいづ
月の
あけぬ

顕仲



雪迦耶麻嵯峨迦假寐卷之十

東都　松亭金水編次

第十九回

そも人間の果敢なきこと。古人ハ電光朝露不喩ふ。現ハ電の光り忽ち早く消るハあらゝとしりぬ。人の命ハその光りの。消る間さへ候とまく。朝の露の草の葉ハ。忽ちとろまるもあれども。旭まつまの程なく。生あるものハかならず死あり。この理を去らざるべ。寛不

恋ひの解ざうべしおかお耶麻ハ安くと。玉あを兒
をぐ竟さとどそきとり右ハ左犯立るゆて。日こハ食
ゆ由細ゆをけぐ。陶後の光云ハ祝ハ。ハいりくそれ
を按ドハ。日夜ハお耶麻ゲ侍をさうぐ。お優文学
猪を拾めうて。夜由寄く病るのあく。青病学
采あうねども。さて殺由あるねハう。丈右ハつ由
月く考ひまくく別荘ハ仮森して。医藤ハさうあう
五山の名俗。あうひハ有殺の仍老ときけばうち拾き

て加持祈祷。急る時のあうぎまど。定業ハ祈ハ
弱ひて。特こハあくあうけうこと。苦しき長ハ祐を
揺げ「老爺さん拾め食さんゲこの男ハ夜由毒由。
お世話を有まうて下さるうう。仍幸ハ快あうて。
四恩ゲくしもいうて変とぷ。陸ハ気を引立て赤惰由
いうて張ますけまどぷ。ざんゲ形弱ひてハこハ祈
強快ハあうまますまへ。モシ私ゲ死ま。老爺さんゲ
どのやうあうぷ。お驚きあさらうと云ハまんとこで丈おうう

が家ふ有りますが。他の影〜ふ吹きすまい。親を兄
遠るいるの役が。夫を名遠て親より先に死亡いた人の
不幸。あくまでもの寿命ばく来る。経方が家へとへや
の。お松生まつきまんの。矣張不孝のふたこぎの
まんなら。悪い奴ごこの年月。稼くと丹係さしたこの
甲斐もあく先く。性く。月色が落ち悪い故ごと名りめせ
ば自ら。お歌きも居いた。この振ふを私ら。右や
左と中さんとも。ふ方は初のあごけとど。第一そと

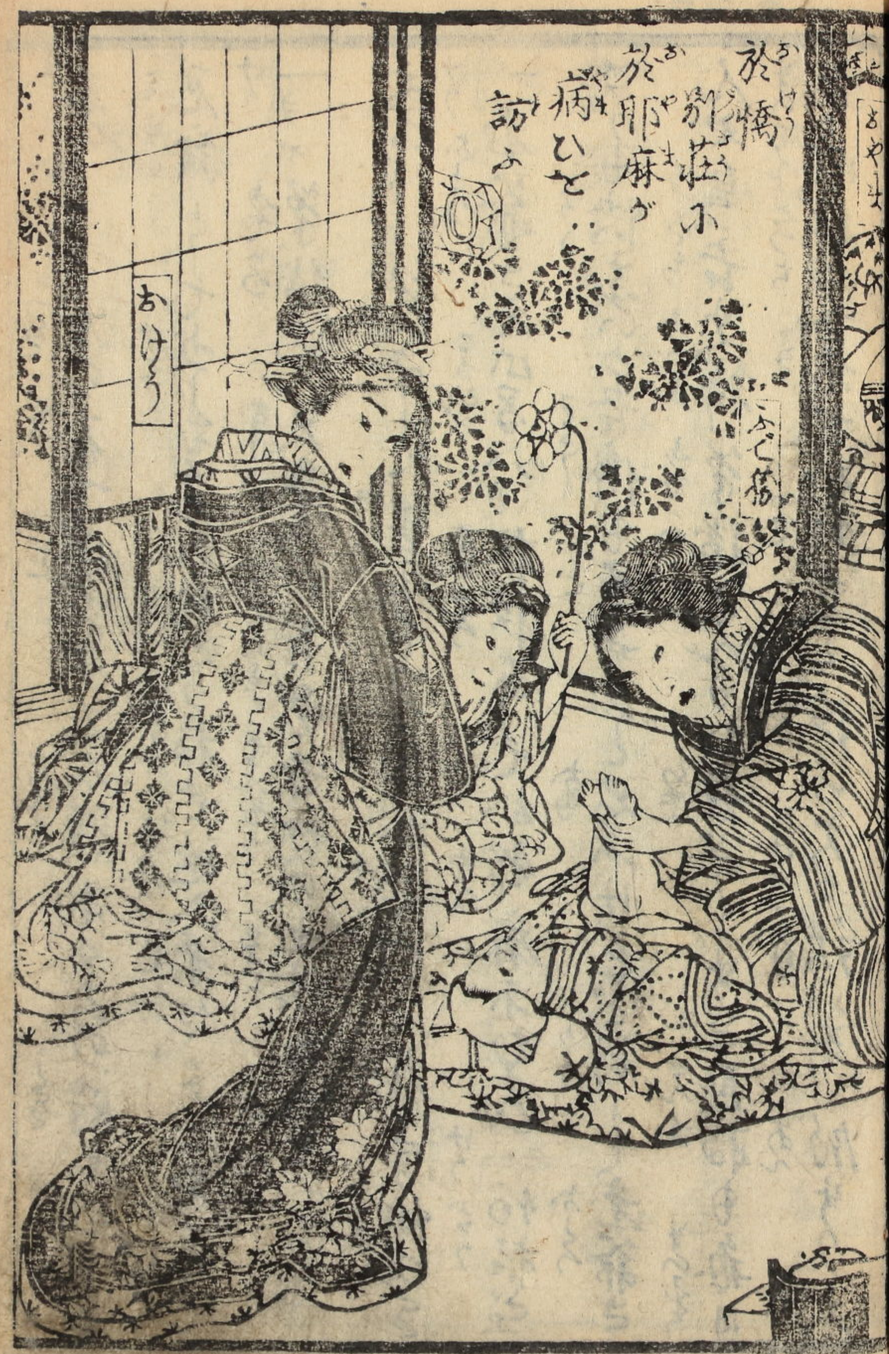
グ気ふ有りまく。冥加のふうとまりまんなら。やす
のでどざいまん。ふ処で吾俳グ乗あく。あまば。烏去も
お後ふ方は一所ふ。陶綾へ帰るとであらうが。お将さん
いまくにお在で。朝晩の役ふ。左振して。ふまば烏
去の支障。よく老爺さんのお世話まく。些も長く
出整男で。お在まる男ふ初ふまん。その内ふ兼や
親も。名方でまく。月つふ。些いお一味。ふ方まらう。
ふ。ふまでいふ吾俳グ彩く。筆勝さんも毛の

て。わの年時く気をつけて。老爺の世話をしてくれると
いふて、若殿のおりさあ家を出て来ました。見る思いしで来ました
て。わしゃいのち助を祖母様お後多いことを受けるな。流
石ごとに不足て傍で。横の物不ををうけて。お耶麻ば
新をぞのとこ足つめ「わのまアお気の弱いさまて言
の四病気で。手拭お為のう。わの不物
くはたのさ気まで。四若方あとびをお性質。をまでごろう
四病気不陳つて。わのまでも果敢ろ考くおあり拭ぞさ

あの。モウ〳〵手拭お為しいて。手作くてさいません。ま
ろまろ一きりのんるば不。あり〳〵ろ手作ばと。且羽きあい
私ど母ば。命不うみくて母お世話をいろん。とろや アモウ考
然鳥若とて母四春の思い気毒でぐいまんろう。些でも
疎不。いろんるのちやアでざのうませんトいろ形ろ〳〵筆物ば。
抱て考る茶四命をお邪麻ば拭の考く出 コレ四
境あさいこのお見。まぐ〳〵ろ二七歳不。おあ〳〵あるもの と
半アぞ不。お眼母まつきろて時くい。驚示ろ〳〵お筆

あまざけ。誠にお母いぢやアごぢいません。ぢ様方のお児をお持あさうて。お乳の弱いのやさうあるの。何でもかでも快あつて。こんなお母を人並に成人させやうとこそ。石にかじりアあうまいせんヨ。今行のうるさて出掛ます。このお児さんが行相ふうお可愛さうぢやアごぢいません。せんうとこそもお邪魔ぐ乳を引こそる。筆揚ぐ赤ん坊の絵像ばこそこそ。ぢ兄さまハ涙の種ぢやア程ぢ歌くさうぢまこうこ。うもあうりけり。「オシニ丈造さつうこそ子。ぢ母アぢ兄出

あてぢ乃ぢ母ハかあいけどぢ。生ぢッて後方ハあい
ハ子。あつ子君俤ぐ居あいろうて。母ぢもあてお情さんもあ
うう。兄さまバ世ぢ桜ぢバ山あいぐ。でモウぢんぢく お年老ぢ
おあり拵ぢん老爺さんのお分のうこを拵しるのサ。丈ハ
及ぢんあづう私ども居ますうう。ぢ不自由のあい方ぢ
いうこまん。生アさ根ぢこをくうくとお考へ拵ぢさずと。
何でも老く快あうこう。ぢ元気をお出し拵ぢゼヨやく
さて居ぐ出さうこう。赤坊さんのお乳ハ涙ぢモウ やるぜぐ


於橋
別荘ハ
於耶麻ゞ
病いと
訪ふ
おけう

かくべゑ

あいあいと次の間へ連れてんぼくなるその時お情さま
見舞としてやおじいさんの指せ。這入来ることを見て
「ヨヤ筆勝さん大きい出世。赤坊の世話も大てへぢゃう
あい子トいひさして走出も見ずに。お邪魔が探る訪へ来
「老爺さんいるハト挨拶あってお邪魔ふむと「何の報ゴエ
でうも快あいの。吾倅も来ずうと思ふけれど。初して老爺さ
んや鳥吉支婦。筆勝さんもお在ざいまして毎日
毎晩。ばちへ来てお在ざる。俥のやる訳へあり。解り大

勢ごさいました。那て繕をしきりとうつて。挨じるだ
ずと来て見ると。ポンニ大分痩されエ。毒ずあるあるお
煮染とお青を持て来ごぶ些後で出後でおいう。命い
食ずありとやうだ。何でも後あへぢゃア然あへヨ「ハイ
ごさうごさいまもを支ぶ後らまとうやア置けれど。除ずぷう
ちりのお湯漬でもおへ入まるとおもくて。ポンニ飯でむ
のぶ思ひでこさいまん「吉振うそんずちゃア然あへト
久打笑会来へ坐を改め。お情ぶ報を考へとうの考て

「今病人の拙とて彼是いつまでもうく為いが。そう方いマア
そうのつりのど。夫不申地不申唯友個の。妹ごこの要。
二死一生の大病不何振ごと一回こうみもせぬ。勿論弄
きゝと時ゆへ。死月とそこで不在て產の容子申足
ときうぐう。支うう肥立う悪いと云て。此振不姿不為
まて申。新うん新うん脈まうぐ自己申稼く接あき
ぐこの用いゆうどあるけまど。色を足うけちゆア帰ら
まてど。志今日家業を勧め。家產大ゆと云ゆの申。

年寄ゆそで。そう方產の。赤先を云へどそ。自己い為て
の為ウモウ 六十歳不申云まれ身のと為ゆ。ナニ宜加
減不拙うて為いで他不何とらそまうと申。まて用ゆ是
まいと申。今日ケ人限ア明日い歳。左振気を考へ
申入へれゆどゆ。先犯の家不申弛をつけまいまて
分產申僥倖で孫余才一の大分限。夫多屋不云へ
まて。親うて居まゆば苦申為い考うゆ。そう処ゆ人の
まうう為へせ。何振ゆへとゆ為まうあゆ申為まゆ。その相

あるア。本家ノ肝ノ煩ラリセネバアル折麝香ヲセウラト。此
ヲ。本ノ者ノ。勧メル。食モ方ガ不便ナ。まづく
丈ノ自己ノ工ビデ。今ノ人ノ友個ノ妹。形シテ
煩ラリテ居ルト。吹ノ。按ジルトノ人ノ。モシ。その人ノ
あいなくば。実ノ。鬼畜ノ。来自己ノ
とヲ。ノ。ノ。方ヲ親ト。ノ。ノ。実ノ。情
ノ。ノ。つけノ。ノ。ノ。ノ。困
つ。性根ノ。ノ。今日ノ。ノ。勧メ。ノ。ノ。

まことのでまらぬ。笑ノ。一遍ノ足舞ノ。ノ。早く。
ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。
情ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。
ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。
ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。
ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。
ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。ノ。

出るのがあつそうで。一日らくと伸びまものサ。丈夫私がまの
病気。他のことぢやア有り者の揚句。いそぐ自己くく書
めとやうあるの。そなたこそ貧さんぶ難くあ。正若者をうけ
ちやア淋しません。何卒表爺さん何もかも。全作あひ
ぐ下さいまいトいよ不お情い蔑ろ示ろくひ「ホンニおお
のりよ通ま。表い他の病ひと遠のて。マア書めさやう
ありのサ。表爺さんが今の世ぶ。全作けとどお医
者さあう。あんどぢやア有るまり。毎日毎ぢん来て

ろくとつて丈で快あるりよ世ぶん。りんの人嘆がーとりよりん
ど。吾倅がまん舞不来ありて。快あるりのあく快
あるうサトいそ世も敬お笑来が。徹と自眼て
いそんと。せーが何ろ爲ひけん「ア、あるりど爽明も
のの。この表爺い悦い為くト表ろうと鳥吉の新を写る。
鳥吉い何ろ笑ゑて。ぐ暮まるおろう有り

作者いそくお情が一言。新潟地方の褒詞ぶ
その牙の非を掩ひん為ぶ。形のできるを言ひよの

今の世不さ〻まくあるまでゞ父不對してこの接ぜい。
表沙汰不數あり。まゝまゝ父子の間。その心易き
不らて。兄弟不數兄弟あり。此本を又ゝ後世
意こゝを見とせ人ゝ悪と せんのゝく事ひきしべし
と。例の表婆ゝ不かくまうを

第二十四

再親その次の日不。お耶麻ゞ病ひいと重ゝて。竟不
宣しくありけるべ。兄弟ハ見てよう。ゝ設けし

ゝとあゞゝ。今更の甲斐不兄弟えて。で亡親不把つまて。
熱紙ゝるゝくあるとゝゝゞ。帰られ旅の肩途をゞ。ゝ
不強ゝんゝ由あ。人ゝゝ不爾さあらまて。次の名不ゝき
蒲書被ゞて。眠ゝを不けゞ祈ゝゝまゞ。烏音を旅
めゝの脇の人ゝ。渾身の祷力わけまて。何せん方由
知ゝゝゞまゞ。知ゝてあゞべきゝゝまゝ。未明ハいゝ不及
ゝゞ。ゝゝゝゝ不人を見らせ。知ゝゝせ不けまゞ孩生て。
延寿る人の寿ゝゝゝゝ。ゝ得ゝ廣き別荘の。間

毎〳〵小麻あるべし。その頃〳〵に亡人の生前のしの出。涙を流さぬ人なきぞ。丈左衛門ハ〳〵と笑う。
畢竟ハ〳〵乃至飛せ。こう〳〵来りて春山あり。見去来ハ
面白し。互ハ慈腸大〳〵あるべし。頓て出入の料理屋
を。三形峰〳〵今有の支度。その他万事を分付。
香華院より新化の僧数多招きて法華経要弥
を唱へ漢補さすれば。その夢ム耳を洗〳〵。実ハ
天と未五。生れんとの願ひ〳〵。るとくで雖

えけど史より後野を送る。〳〵初七日の法要佛事。
こゝ別荘ハ〳〵ひ覚去来ハ陶後へ帰る。鳥吉史
帰いて小麻亡人の為書七四十九日まで。通夜せんとありけ
れば。さて僧ハ稚児の。春巴帝小屋副て。来所へ帰
りけるが。丈右衛門ハ右ハ左ハ。邪麻がしを高とゝみて。
こで賛〳〵書〳〵とり〳〵。孫児の老らしきハ。愛さ
を云〳〵乳母あり。元来乳母の二人あれど。僧殊
ハ功者ゆえ。これハ任せ〳〵ものゝ。長くあるべき身

家を移すべき処陶綾小路らんといふにて小路に丈夫。
さて小女母を養ひ申さるべき事。家業を為して。孩児の
扱ひ。縫別ざるものこそあらん。同じ年恵あり。
情い既小肉身子ゆえ。他母を且つ他の女を小侍
いまだと知まじ。然るに世話せよと。母
あるいは人の内小。浅見あるべし方り史あらん。嫡孫小程
子のごとく。昔ありもひ横ハせず。今より後お情を
ひて。母と為べしとおりひんこのことを法らん小。
左のごとく不ようて。別一家小弘めを為して。お情が子と
いふせける。あるまじきこのお情。この者不ものいふ物
病ごとの基しけまじ。子ども子がるといふ名のこ。別て乳母
ふうち任せて。麦不倦しく老まること。只丈夫ぶ
ふるおのこ。他母お母。体小ものせず丈夫ものを安
堪して一年暮りを送るべ小。お好いいつ産ある和方と
あるとて月日遂。ほまるまで男子を産けり。丈夫ものを
養ひ申。子一人母て何とやらん淋しくこの新小。

男の児の生まるゝが嬉しいと大へん喜ぶぞ。伊作五郎と
名をつけて。様よ死よと老しけるがいつも縁ゝこの時
ホ。お情ハきつく癒むと云く。蓑四郎ホ縛ゝ甚て
こと生を老まること降参あ一こと生お足よお豚さん
諫ホこの児の奇羅ホ云て。絶てはえゝ鼻つき
が。おあホさんと生撲しサ押つけ大きく赤へゝうゞ
好男子ホあつて腕脂ゝ。吾倆もどうゝして比抵ホ
子をゝつと一人産ゝいりんぐ。ヨサ豈ホ笑ひヨ。比ひい豈ぐ

驚示とさるゝうぐ一そゝ史ア。ホ抵疾の癒ゝ
らゝこと生ぐぐまゝ。蓑四郎さんの方が。伊抵ホ若
ぐぐひまゝ生ゝ。そゝ史ア蓑母さんのお笑くしの不。仏ホ
ホ入ッ赤ゝゝ「あんぐう紛ゝ赤へが吾倆ホ史ア。伊
抵も性が会ホいきゝ。ヨ児の四郎ホ可老く赤へ
。史でも表倆の子ホゝと。お云ホさるのを蓑ぐゝ
いつちゃア。伊抵も生処が死へいゝ。アイと云て左抵と
けまど。成ゝ赤ゝこの伊作坊を。ゝゝの児ホ赤へ

りんご「モミ」左振あるとばのお児い。何振不僥倖う
あるとません。先次人不笑まゝ。老嬢ゞとのおかあ
まゞ。陶徒のお祝ゞう不当いさゝゝ。素さゝ祝所
で。中ゝ左振い来りませを。丈ゞゞうこのお児を。老
嬢のおかあとあさいますう丈アゞ。法辞いあゝまんまい
「そゝ丈アまマ言振あゝのサ。左振ゝて彼地へ隠
振さまゝば。何不由ん当いあゝ。あゝ由一所不隠振さ
ゝ丈アゞ丈アマア。二十年由茶のゝサ「モミ」左振あゝと

まんと。一生涯来くゝてゞ振赤僥倖いどゞゝます。
「あゝ丈振赤あゝを。流あゞ由お云でまゝョ。何のかゝと
脆脆ゝゝ「ニ雅不由まゝゝませんト後事をかゝゝ
憂さまゝる由。和食あゝゝとあゝゝ是ゝう。彩て月日不実
ゝゝあゝまゝば。何の時のゝどゝ不ゝ十年をゝて。養四年十
一不あゝゝ。あゝる不七業八業のんゝう。ゝゝあゝを。さゝ
不ゝの業法大人由まゝゝく。あゝゝう。年あゞを憂
あゝ不。二三度あゝてゝく晴紀。年あゝてゝく訴む。

とを不用て父丈右衛門ハ。隠りあくらちゝ新び。世を捨
あるまの兒の利愛。お邦麻ゞ島方で居と。あくべさこ
七歳くらゐ。あとゝ伯母ふつけて七人を。ゆひ出人の
宮こ。けりゝ。さて陶綾の兄。今年七十ふ隠とゞ。
国より郷ふ育ち。対八年ふ仏食ゆ器ゆ。ゆ。
あるとゝふ孫。金ゝ。春ゝ。舞ゝ舞ゝ。歳長ゝ。ふ程
ふ乗ゝ。武とゝふ在所ふ。陶綾ふ伴ひ十日二十
日。遠国ゝ。ゝ日あり。島吉ゞ給の字を舞ハ十ゝ。

の兒ゝ。ゝとゝ。この君ハ二十果を紙て。五派ふ壮士とゝ。
あるゝ。幼稚時より利愛ゝ。漢書等用ゝ。史ゝ。
拒蕊を日稼ゝ。ゝ。その。ゝ脅力人ふ証ゝ。五斗の俵
を片手ゝ。狗ゝ歩行ゝ。島吉史掃ハ。ふ
ゝ。その者人をゝ歓び。ゝ史ゝ。ハ孫を娶り。
初孫の新ゝ。ゝ。ゝを。ふ怪ゝ
ゝ日ゝ。ゝ。ゝ日十ゝ。ふ。世俗ふ
ゝ。ゝ甲斐ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ふ。ゝ

和合楽
千年樹

花
紫

秘義しるしがを著すべく秦四郎が遥前に来る
さたい。字を帝こと見の俳を書。脱ぬ出て逃て時を
かあらぬ。侍を離れとあ。陳ぬ字を帝ハ秦四郎が。
容子を見ぬ年とせ。甘智といひ態といひ及
ばねこの数くあるべ。何と書く墓ハ書くかりに訓ぬ秦
四郎。まと字を帝をんぬ老して。祖父兄弟ぬ死
ひて。孫舎人伸ひ来て。半時も侍を離さず。夢同
あどの對対とあれ。新て七の翌年正月元日。吉書

振あるべしと。文統人の新七の隙の養蚕。二十を振る
老まぬ除き。三十人可至呼び夢ぬ。廣生成ぬ並び長
く。ぬ長く。ぬ家朗師の待参の中のめぐりきを。者
ぬ紙けるをりぬ。文を出ぬ指揮して。秦四郎夫
大文字を。ん一枝ぬ手べしと。大奉ぬ手を四教漢世。
まて仍の字をぬ手んとて。土を第の皆ー者ん誘の
字あど夫覚らんと。のんぬ。秦四郎。老を筆ぬ墨
を舎まも。伸あどをてすぬ。ぬ。ぬ勝りぬ大きして。

元
点をうつべき漉紙あり。いづれもうとうとして暮るゝあり。
をかしき所をもとめあく。夏のことなれば、その点を
うちしりぞく。墨いたくあくまで逆もどさゝず。
こゝをもとめて文字の墨のいろ。花瓶あり。てらち鏡びゝ
でらを自己づゝみ。ゆゑ切てその点を。墨くおりとり気象
の。茶憑りしいト隙をあく。鏡びてゞ暮らしける

嵯峨の假寐巻之十終

雪廼耶麻

嵯峨廼假寐巻之十一

東都　松亭金水編次

第二十一回

かゝて宿執のひく所ゆゑ。道をぐるゝのあるあり。お橋ら
右ホ左衆ゝ帝ゞ。怜悧ホつけてゆ人ホ恢いぜ弘卒
ゝて彼を逐ひ。その外ゝゝあるゝざまゞ。伊佐五郎
をりてゝゞゝ。この家を徙せあば。その恩産の母
ホ倍ゞ。茶曜栄花ハ人の侵。茶ゝゝ格別あり

と。種々人を苦しめて。よき思按もなく秦の帝
まづ〳〵十二年。逐出すべき旨度もあらんぬ。
せんと。家人なる例の造を密に招き〳〵吉例の行根
いくものの秦の帝が。否も〳〵あいけまど。生涯あま
が利益ごとなれ。そもそも〳〵旦那の秘蔵中こまごまける
と。そなたは。出来さうもなきあいが。ならうあらう招めらう
の。約束どおりなれば。陶後へ参て跡をとらせ
俳作立帝を吉例のふあて。爰の家を継せまば。

是。丈夫。気が親睦まるが。何とその仕法はあるまいか〳〵。
拙者。こまい家易あらうぞ。是隙限らうぞ。
一あらう條を申せば。旦那のあめあい行方もれ実ふ。
後先と申。老分者。其処で陶後のお血脈は秦の帝
さみでござりまそうう。彼今此方だれ熱飯。お生
まあさの。こうこまうして。左様年ねこいあい乃
理。あ〳〵爰の旦那の思〳〵在あい行でもかだ。秦
の帝さみ不こて在お譲。あさる狭うとマアスこえ三ヶ条

全部で彼是と。やかましくて仕方ない。人が
美い辞ごとをいうやうな仕方出来ない
ことばかりまいて「古振サ」どうして恭しく
身を引せるやうなまねば。そりゃ仔細あるけれど
何振して宜う吾倆ハ一向仕法がわるいヨ「何
を十四まで十二で放蕩を勧める訳ものず丈
ハまるアン宇を命剛。この次ハ方ハ居っまりでぐり
ますよ。彼奴年四美い僻ハ在抜月のあひ
和命。滅多ハ事をまいんと。却て害を出す
ませう「古振サ」吾倆ハ言おもうおのサ。そりゃ何
振して。振うて彼是といくあいの男ハ。工夫して居ハ
いん。振向いまんとあるまいう「古振サ」どうも疏漏しう
でぐいまんネト妻時考ぐ「ア宜ア」でぐりまん書後
こでの公ひ付で古振まるうあるう。手処ハ何振ハ
あるませんが。こで芝嬢のあるう。どうで。虫素ハしいハ
ぐうませんが「ウ」そうも何振あるア子。大概のと

あるべ。出来あいとりて人伏申あるまじ。マア云て呼て足あ
「十二箇根ぐでさいます。然しこりゃア根ゝゝ。マアロ出
申出来あいあるべ。半腰がおん弱くッちゃア。直ぐ元へ
戻るまみそ。何ぞ申あるまあくあるまんが「左根ゝ工。
あッぞ者俳ごッく。どうゝ吉根しゝとゝいん一寸ごろう。
條の立さるあるべ。でん赤ぞ申する縫りごョ「丈
あるべ中ませう。モシ方一人が呼と来るうぐさいます。
マア此方へ入ッあるべいトまるとあまりゝ宋宝へ。お情と
伴ひ密ゝと何ぞ皆ゝ食ゝ。言遣いあるうぐきけ
が。従来お情の屋人ぞ。こと不限ゝん門用あるべ。お個
密ゝ不結らんと。今日のそ不あるうざるべ。雑あゝもあ
由あ。効くゝ丈より何あ車由あく。五六日由ると。
須いは如月の中旬あり。お情い番ゝ帝を近く根を
「サテ使のこゝ由あいが。おおゆぐんゝ大きくあって。
今年いモウ十二ごろう。合まじの皆ゝ不家伝云て。風
を揚ゝう秘来まゝ。まゝ何ゝを引ぞって。法まゝまへ

熱さをうを。毒盛りてくれあるまうせんで。ひつあり老爺
さんが吉報を作く。最四郎も十二不成てくれまば。
今まで。のうふあちやアおうとまい。徐くこと人間並
の所作を教へて往く。自己が跡を継せるもの。大勢
の者人を。使へばとても痛さ痒さを。あくるのぢやア
何の報もあるまい。然し。あぐくこと処を自己が。脳まり
教しく云て居ると。郎くて悪いてもある。言方ぞうう
工夫して。宮報ふ殺くくろ。勿論手習ひや学ぶ。

あるやア男既の指あぐくこと。言処い自己が何報ふも世
話をせうけもどその他い。言方ふ憑むものお詞。ドンニ出
毒現のあい所。仮令肩しくあさくるのでも。男の狡いふの
方で。不引懼ぐって居るけもど。女あやといくと自くこ。る
麻ふまるでもあるものが。右左ふ井いがちで身の為ふ。
あくあいとが我干もある。とて今月結度。おおふく
くこんなりがある。勿論力も有一統も細し。身ふ怪い
あい資力業や。もくと身分ふ不知意ふ。ふいい方用

春四郎

門月抄
おけう
春四郎を
逐ん と
お橋

分付あいがよく能うと空て型の物うち。吾俳のうの
型りあり。あるこの。サテ七ツ八ツ位ごとにあり。朝も今
まだと遠のて吾俳うり。先ず記て清水をつかひ。まづ
吾俳が記こあり。床由あるまうし。歌の水。煙あるとも
ば記がけあり。後聚をつけることもあり。その時八耳鬱もまた
あくつるものを。持運んでなるとが海ぶり。元付るのあ
あの役。まこと四拍のこまいこ度く。佳とこうの法
ド仕をして。跡でおおい拍るのどョ。勿論こうが拍

拭四。使るあるのあの日の濯しで。奇麗ふ洗つて拭
くこうこと。こうこと。愛の縁側。床の日のまうり遠ひ掃。
傷ふあ、火跡うう。煙草盆のふき掃除。唐紙まで
由ふく洗つて。縁あくあいやうふ拭るのサ。まア極つて
用向を。ざつとこが手拭あるんじゃ。まづ茶つて出
あるこう。まこあく分付るうう。何でもアイくアイくと。
直拭あてきくまこが宜のサ。何拭ざこが出来
ようう「バイ」こまい出来。知こあいこう俳ふ

今日「マサ」今まで横の男の立。壁不由右あいおなじく。ホン二茶碗の仕舞前。お有りぢやアあるまいか。そうやア雅ふでも咲ガ宜。まつ〳〵自己い面倒ごと。こと言て異見彼しと異し。他ふ分ぢやアあるませんヒトかる大家の悪頃息子ふ。仙食取物のいつけ方と。後ふ居る宇太郎ガ。惶こと様を言め「悌ごぐいごぎのいます。今ふお坊さんふ立作物い。食女中のいつん四用。ことを何ぞお坊さんふ。お

きせあきるのでごぎんまるで。ぜつて坐嬢のお使ひまする。お侍女を踊め中働き。その代四五人居ます人ハ何をいつんのでごぎいまるそう。何ぞお坊さんガお牙のお為と。やしても脳まりトいそせも敢ぞやさつこ気ある。眼を睛つて白眼つけ「何のいつぎる指出。を方のの初つてこ今ぐいまの。女ど白い裁干あつても。食安く。の用ガある。ぜつて。その袂ガつてこぐい。友個ふ云て咲きう。昔唐土の王さ友ふ。漢の文帝とつふお

方ゞをしらず。孝うう親不孝なり。元来天子家
のてゝぐうう。何の更衣うう命婦うう。お仕ひの官
女ゞとゝ。義千とゝ人限りゆゑあり。何一ツ自分ゆゑ。家
うゝぐとゆゑ。ゆゑ義母うゑのお侍のとゝ。
他ゆゑおうけぎ。自分ゆゑ。拵ぎしうのとゝ。そ
のお義母うゑゆゑ病気のゆゑ。のゝのお服の帯ゆゑ。
お解ゆうう。ぎ。看病。ぎゝ。大病ゆゑあって
原囊ゆゑ。お撫ぎする時ゆゑ。汚垢ものいうゆゑ
おゆゑ一ツ。お掃除をゆううとゝ放。人ゆゑ食感ゆゑして。
孝行ゆゑ。ゆゑ。二十四孝の中へいれ。今の世まで
ゆゑ人の子の。孝とゆうとゝ。古い本ゆゑ。ゆゑ。
古ゆゑして。ゆゑ子の身ゆゑして。親のゝゝ。ゆゑ。
自分ゆゑ。ゆうう孝の。更ぎゆゑして。孝行ゆゑ。
ゝうゝゆゑ。元のゝをゆゑ。孝行ものゝ。ゆゑ。
ゝゆゑ。ゝぎゝ。ぎ。ゆゑ。ぎ。ゆゑ。ゆゑ。
ぎ。天家の子ぎゝうう下ぎゝゆゑのゝをゝるのゝ孝行

おりしかまくと音併ゞ寝いとおのしかそのこゝの中ゞ
らうが可毛子あい旅をきせうとゝしの母夫張
折麿をさして。他の痛さを覚える為サト吹て
今きう字を命いかくまを初母あらぎるとゞ。然に寸
あぐら勝のこて。ろひあぐら不止不けゝ

第二十二回

とゝきうか情い相毎ホ例より早く起て来ゝ命を
おひ使しいまゞ勝毛母寝く退やうぞ。如風おゝど
の吹こえ。足の指母動離ぎうホおりし時ゞホ用
捷いあゝゞ。已い稽を変弱。そのとホ居て俵ゝ火
拝ゞきとゝ母優くと。大煙ホ手足を縛りあぐゝ。ゝを
ゝ処を掃けこて手を拭とその事毎ホ指揮して脈
母あゝゝ働くゝ。こゝまゞ来ゝ命い稽ゝホ。揚枝
ゞあ指先母。勝脈ホ壊ゝ嫌ゝて苦悪ゝる
くあけ見ゝ母。元素怜制ゝゝ母の微振に
さくゝゞ毛さ塗く働くを。清侍女撫女

つるゝ事をすきなる私どもがいてまいんくらい。
こでお義母さまのお供まいりやうくお考葉不きこへまし。
もうえこの事ども勿論此方由お義母さまの。百あづつとは振袖お祝四
郎さんお婚ましたこそ。三あお坊さん不洗いせう。モシ三作ゆう
あふうさまべそのあふいと義しく三作まう
けまど。まどお十二の不さふおも丈でありとも男のお
児を振あとまでさせ中ない勝まり振いあきれう。
お義母さまグロ流ど。入ッある長い冷方由あへグ五

振あの時い私ど由ゲ。洗ひ振ま由いてまく。お坊
さんが拝ぶしてこと。中さばをまで海さんこと。今八奥
へ入あのくお振あふいお在おさこれ。サアくこ処八お
拝て。些お乗を拝ぶしまう。ヨヤくお拝不脱ぶ。さぶ
まアお疲うどぶいませう。別くこのさくとの近八各
ふ由まくこ風の重さ。雑巾ゲけまで拝ぶんこ。オシニ
お可愛さうふとト現不ん赤さ下女舞女由。あ重
むまで不ありけまば況て字を舞ハこのこを。ん長

まくおりくども。已ゲカ小奈仰とも。まくきなりあくはる
小口を禁こうて出家するのこと。まこと旅方もあらざりけり。
丈右衛門いとまをのことを。宵の夜小もあらざる今日とちぎ。
明日と言して泳生の指めを。花さく咲れ日新も渥と。
この夜ハとう弱き梅の盛りも空しくこそうのでも一日
桜狩の。催ひをあさんめと。多くの人りのうち毎く女
のこと多くして。華美あいうもとど強ひく。風流とい
いひぐく。今回い女を解まくあ。風雅を当小お

さんとゐひ。例の其乗一孝赤ンど。その他一家の流小も。
歌俳諧小志ん。老こる者列あく。ものもくお使こ。
夫婦さく葉らう者とぶ。行方を究こハあけもども。
花ある方を志して。以とその人数十七八人中小来
しらうう。四郎宮右衛あり。ものもくと歩行しゲ「コウく」を
乗新肉行と今日い禅れ長寺へ行て。六小見て見
時きうう。まくく子供ゲ二三人。歩行小園ゐぐらう
「方報サどう由深雲り。イやくこもこう由井う

涙で。接員でもお拾ひまさうな。更ら宅お願ひ。
老ぢんぞも茶と遠うて。ども切箱屋根掛者。言い
訳ハ禁物とあるまゝ。丈「ゝゝモウ左様ら大分弱い言
を吹出ゝ。イヤどうも悔しません。我家ごと出
ますす。モウ来年ハ本封還ら。ゝゝ元気者サ丈
丈で元気がある。ゝゝ時ホとらで。金ホ茶の一杯も飲せやう。茶坊を張め子ども苦い。
大分遅屋の客ふふふる「一番「立モシ旦那彼処の茶
郷ホ。ソレ年場かぶきうませう。あるもア全体苦労人で
陰ホ影せる奴でぶゝまん。マアあまゝお考ホせエ丈「一番
左様ら。幼ぶるる。主の何ぞもアあるもアあるもの「一番
イエ全く左様ホ條ぞ。努邪ぞゝませんが。才子
の宅で教田出舎で。ちく有ゝて長ちものサ丈「マア
何ホ子ろ手処ゝ様ら「ト先ふふふて丈ホ出つ。茶郷
ゝ遠ゝもゝ動也ゝゝし。各言処ゝ様をかける「金さん
ようゝ入ッ来ませうと。まゝお湯を上ませうト拙の

義左衛門て出た「サア食こう素ふ。空地を歩
せう。サア手を出し」こう〳〵ト菓子を取て子供ふ
ゝ。こーらう。素ふ。亦申父のお。あを出せば「何ごまア。
おあの手の稼ぎ〳〵あい。ぢて脇ぢ脇ぢ〳〵けど。
モウ三月の寒ぢ風。独ふ乗まり〳〵申止がいい。まぢ〳〵
コレ見ふせエ。おこどんの手ようも稼ぎ〳〵。何ぢ独て
乗ぢ風の糸を揚て申。解まりひどい荒ぢうぢ。コウ〳〵
うさらう申。ちと気を付て。ぢ拵ふ稼あ〳〵あう絵〳〵

ぢうふして歩ふ。モウ腹〳〵暖ふあるうう。こふおぢぢう
ぢ〳〵「笠ぢが」ナニ此ぢ風申あげませぢ。独乗申まい
あいこーません「ちまぢぢアまア何ふ」ぢ拵ふ
ぢ荒こらうト不実いまちどぢ脇ふ。雑申がいて
この西うふ。あうーこふ気申ぢ。まこと素ぢ申ぢ
こらうを申。申。そこいこぢ。ぢあ申ぢあうう「トキニ見物見
うう恵ふ。由井ぢ実こいこませうう「左拵ふ
供ぢぢ。その方ぢおりうこうう。サア子く出うは

ずうと立て立直して演舞を不致。破不晒為る様の。貝あと拾ひ戯おもつて。人を見て遠の破をと不。酷と人々て白き者の。裏千を有く変り居て。寒りて居る走丈を来の。人て居る事を呼び「丈彼処不居る者く。石を拾つて中つて老不死ア。衍でも拾本物を出棄美不出ぬが。何と者て人形くうトいそまて教ひ子供連中不も春東歌を年ハ。丈を来つが毋方の物。柔也弟と従弟同士。今年十五不ありけまば。子供の中の年嵩ある。遠くこ出て也を人まり「サア俳ぞおつて口後。中ア史ア寄物ぞ。彼処まで八をいやうでも。二十間ぢうある。お前ごとの力ぢ史ア。第一石が達き史ア志出へト朝るごく不いそまてい。子浮子供も勃然として。あの手ぬの孫を拾ひ力不任して「拙つけても。現不歌を弟がいとごく。在ア和も美けまば。歌を弟ハ笑ひ出し「丈人乗せくこの乗りぞ。ドレく吾俳が本事のうと。

七里が浜ふ
子共
石ころ
きら

お月かけ殿ト碗を拾こ覗着を定めうちゑくと
ど者あ〻中らぎ。さとども石ホ強きくむとある酒一
容ホ。きのく立どもまく仕方へおりまび赤ゆうちつる。
三ヒ交ホ〻て中ら移び。金く曹とうちゑ〻歌を帝
へ新を赤ろ「サアく更ホ〻ホ方モウ一適ホつて
又ホ者せエ。伺新〻て立新井く中るのうト云どホ
誰も知るのホ。歌を帝い中ホ〻を向き「イヤア
行ホんの来ヒ帝さんが。まぐ一適ホ中つみ強サアく

来さん殿のく立焼「来おあおきくのみ赤いのヲ「どうせ
そのとホア強めへけとど。殿のて又ホ〻ホら移〻サアく、
サアト動めらと。来ヒ帝い又ホ〻て。ヒ者の碗を二ツ
拾ひ「来サアこの中ホ〻ホこの〻。立襲笑を世ろうの
どトのひく覗笑てうち仕くまび。遅こび〻て一羽の
酪。笑前〻殿中りけん。ちの後を処へ倒るまび字
を帝ハ花蹴〻て「来ヤア中〻〻トのひホ〻。一散ホ
強ホきて。まぐ新蕪を酪を押へ強戻〻て丈

あるのがあく出て「坊さんのお参でござりまんと
りくバを処あるくも。食とち寄てことたくと。鐵
愛きて愛を時ハ止ば。丈右衛ハ限りなく。人程ハ歌
べど。撥を弟ゞ芸を弟て「あるわどこらもアゞ物どう
ふ。あて。全くの偶中サく。イヤ食さんの、お敷ゞ出来
まくと鐵ハ自ハ撥を弟ハ弟の廣云合さくふ。引
ハひをとば石ハ憚て「十二偶中りゞもアあい弟さんの
とを赤のゞ。あて。石投ハ右も左も。相撲ゞもアあ吾孫

の方ハ。負ちとハ弟ハ。遠さんこの物ハで。一寸
感こハとりくゞもアあいろ「行振しておあを大きい
ものヲ。そアもアハ行振ハ悪ハあい「ナニサ左振りくハの
ゞもアあい。本相撲でも出強あさい。大きい男ゞ稚さ
赤人ハ。負るのハ我子ハある。時の御食とさりやりの。
とを下を小周くの角。サアく弟さん一寸ハらくト
弟弟を解ハかるを。字右衛ハを処へ出て「七
もアハ行振してお坊さんと。お振といお年

ちぐひ。雪枝おかぎ葉い万一とて。怪家でゆあさること
はまりまりせんいぬようろおぼりあさつて。投窟奥
ろ基ゆ碁碁ろ。雪枝おとおあさいもトかりく寄
めて假処此処を。遊蕩てその黄昏。一同おぼり
けり

嵯峨の假寐巻之十一終

雪廼耶麻 嵯峨廼假寐巻之十二

東都　松亭金水編次

第二十三回

却説蓋糸撥を弄いけり石投ゆて柔や弄ゆ。頁さ
るを悔おくおりひ。何をぶおふりて楽ゆ揚。この孤を吉が
ざるとば。その財憤を晴しがうとて。僅のことを根ゆもちて
を見ようを走さ家宅へゆ帰らぞ。俄ゆ連ろる奴を帰
しそのあい大多屋へ泊りその積り。うち連て帰る

「今日は井が濱で大和を見て。ヲイく宮を辭宅へ
帰て。投扇興や碁や將棋が。官らうとおあいそう。
何ッも工業さんハ。碁も將棋も出来るの。「左様サお出
来あそばすとやうに。まづ碁おあ相手ハ。碁ハ
あんの中見教し。將棋ハ別の利屋を。お呼ぶあすの
斗りでございます。「左様ならばヤ對方ハ
わく。自己も若ッヤ出来ないけれど。夫ハヤ些信ど
ら。「今ハお湯でも濱まいって。一番教てあげて下
さいます。私も児供の時分ハ。兄弟ハ有て宵ハ
大きく有ッちゃヤ一向止て。誰ハ弱く有ますこと。「ナニく碁
將棋ハ止て居て。手相ハ下るんだちゃヤねく。とる人
が左様いよ。「ヤウ侍女ッけ有り。「ヤウ撫を爲る
ハお湯を石ます。今ハ出張をあげますッて。「ヲイ承
知ぐまく有ぐッ。早く何ぞ仕度りのぐ。「ハヤく。お湯を
お出ハあけて。出張でも濱まいて。然して宵ッと有さ
います。ソラまく。「夫有ッて宵ッ宮を辭て

の種々で。百味の准備をして亟亦ト心頻リ亦迫て。
湯ハ入るさへも全猶去く。箱ハ揚まゞ指も出て丈夫
ハさも業をさり合ハ亦がうゝ「サア粥だらゝ。さゞ空腹ハ
つゝらう。帰リ不何ぞと思つゝが生惜あの通り酒ハ
何ハ亦ハ亦ハ。接ハく帰つゝが。食後ハ粧ゝらう。サア茶坊
も粥さんと。ハて一訓不語ゝが宅。ヒ下も殊ゝしいお吸物
ガ出来ゝ。ヲイ〳〵 和尚一孝先生も。猿ハ不ハで指ハ
ハ一例のソレ酪をいひ対て。亟不吸物と思ハゝ。然〳〵

屠や鴨と遠つて。何指ゝ帰ハ思ハ。まづ祇
毒を思ハうと思ハて。種〳〵探〳〵ゝ思ハ。然〳〵
あゝゝ彩りハ書ハ。毒ハ結と祇〳〵ものゝゝ。料理ハ
古指云ゝ。「ハて 私ども八手の手ハ。一向とゝんド手ハん
ゝ。陸ハ食ゝ語ハんとハゝゝ。丈ハゝ早く指ハゝと。分
付ゝゝ何指ゝゝハん「ナニ仔細ハゝ。ハ〳〵ハんの。
丈ゝ中ハゝハ。お坊さんのお業ハ。ドレ〳〵一杯いゝでき
ませう「実ハゝハ甘心ハ。ヒ亘不彼位ハい訓書。

たうと一箇でお利益あるこの法宝ぞ。むう〜藤朝の
ふき八丁碁の。紀平次お母者られ出を妹。妹ふもう我
まうまうこと頻りに不賛て止ざまば。桃を爺ハ吹ごに。
さて母悔しさ陽りあく。柴四郎を爺ハ〜見ずう。
物まも云ば飯を食ひ。墓をおくことのまま。扶抜母さん
ちをうち。次の爺へ杉あぐう拙話「シ食ゲ紙えぞとこ
つて。爺〜おあつうを爺ちをうの宿でも杉教〜ゆ去ゆ。
まう雀ウ翡翠ホでも。中とのあう寄物ぐらうゲ。鶏を

丁度りて加減ぞ。行のつまうれ〜トいひあぐう出方へ来う。
待ぞ母のまぐ柴四郎母。字を爺母出て来ゆば。お情ゲ子
食へぞうと逃入「ヨヤ伯母さんお一人ウエ。お淋しうぞ。
まをう「イ〜桃さんうう。お出ぞ今きゆば柴坊が。今日
演で取ことのつて。行ぞ酸の吸ゆとうを。ソレを処〜お呉
ぐぐ。吾俺ハ行ハ祝母を。を拵ホりの。乳味ゲ悪いうう。お
間サ。おあ弱る者ウ弱ておうま「今。私母お名ハ伯
父さんハ強豆ホ自慢で。病〜ゲつてお在あうう

ゝて破ぶるまでは。決心をして居るうちその中に運の
悪い奴が中つるのだ。何も知らぬ。自分勝を
まるまでもあの子へ。大うそ彼兒は已にそこの人情らしい
新をして居るどうの子。何ぞ貴らまる男が多でも
まるし。異を記こして高勝が新をまるうち彼
兒い居サ」「まだ出さんい怜悧ごろう」「おゝ他の
月が、彼でも怜悧が出るるの子へ好れ」「まだも
伯母さん食ゲ貴さん」「とうもアおあとの著サ。伯父

さんの出世遊ごろう。お捉落が貴るのごッ子。そもそも宜
敷が有るのぞ。解まう怜悧でもあるまいねエト何
が拵て出来ぬ事を。難悟おるして悪さがぬ。ぬ女
の僻と思いさん。この打出ぬ事は。仲ひて
が来り「ヨヤ親さんいて居が在り「ムゝ出さんまち居
とヨ。サア宮を事先刻居招ぶてこの出。何でも美人拾
て来あナ「ヘエ貴で拵ぶ」「宮を事が何を
するンぞ「至出ぶ招出と仰まこと「ヨヤ七ヤ

望みは
まつせ
泰平郎
御子郎と
碁をかこむ
たい平郎
宇太郎
かげう
だつた郎

毎日こう。丈あるノ爲ガ宜。吾倆ハ碁盤
をとりまして「サア来ては親さんと一番おてつけをあせ。
老爺さんの主仰あいこの位大分足て来て。モウ些し
こう旅ぢゃで。誓言をさせ呉ると此方ハ大造お美
ふまつこ。ちゃ〜親さんとアの根ぢゃくん「どうで私
ハ情ひまちゃんの。敵箇ぢゃ「ナニ〜金
ちゃアいけまあいよ。何でもかでも互先さ「ナニ私しゃア
絡いこう「弱ひいまづんと初まとゆ。ゆのでハ客の

主仰あるう。彼是といそまあいが宜「ハイ丈あるう先をいと
ませう「吉根ウエそまちゃアあ吾倆ガ自ぶ子「吉根
とあく親さんのお子隙いちゃあいがどうせ来ガ根
ゃアこあいのサトいこちゃ変個いうちかる。ゆ仕ハ更ホ
考へあく剣とあちゃホ忍地五六十ホ及ぶ「ヨヤ
まア自ガ知ちゃうこ。アレ親さん気をつけあいと。隅
をこそ見るヨ。ゆの根ハそこの来の碁ハ中ハ初の思ちゃ
こう「あるゆとこちゃアあ死そつこ。アレ来さん結ておこま

来
「イヤ〳〵結構あっこサ」「コレサ」「ちゃう大人まく」「あいまア
結てあげあさいナ。ヲヤまアこちゃ一本位。まうて来つて
ゆかのうしい子。撥さんそうちゃ」「あ持てとう〳〵一本おて四
筋。其くのみたその撥ようう。此方の徒が義手う大きい」「
来
左撥の工。何ごう一向来ちゃあい」「アレサ」「来母さん強い人
ぞぞ
ぞ。助ちをしちゃア徒ません」「ナニ助ちをさちゃう。
来
知ちゃあいうちゃあ」「マアお結形〳〵ちゃちゃ」「ちゃ」「アア
来
あいう。その漆へお形あさい」「アレ来母さん」「ちゃ」

ちゃの「あんごを云て居ろ。長俗クロでさ〳〵ぐらの子。
来
おあの撥ようあの」「ちゃちゃごって」「ちゃ」「ちゃ」「ちゃ」
せ結貧ちゃい貧ろう結ろ。二箇のうちごりのヲ。貧て孫を
ちゃの位あう。モウ〳〵止てあまあ赤せヱト這い来四郎ジ十
ぞう分結と。あつてる弓面を出〳〵てお情いぞう〳〵と
来
撥まうん」「ヲヤ伯母さん形〳〵ちゃ。何ごう知を赤く
あうまうと」「ちゃ」「ちゃ」「ちゃ」「ちゃ」「ちゃ」「ちゃ」
止不あ。何のうしい来四郎ぞ。親不むうて元ちゃの

あんのこと。無作法なことをいへば。平素猪頭ごとをする
うるさい。碧巌録の事我れの碁をうつのあるませんゼト
さも怪しく思らを罵りを第四番い碧巌録を突こと立て
ゆみば「宮本武蔵」を第一番とを対。そして手の方達のうく
宮本。金俵は招かるとふあるいう宮のサ。手あげ勝ハ先
ゲ負る。先ゲ猪ハ手あゲ負俵。どを何方ら猪ら方も。
敗ハ負と方ゲ。面白くあいハ初まるとゆ。マア猪頭ごと
ハ右あいゲ宮のサ「いうきみ左拳でどうもん。武ハ右

ゲ先ゆまる。まんぎら存ませんと人の中で。恥を欠と
ゆござうませくら「十二月廉方碁を右ら右いとッて。
恥といゲがあるのハトいうまて返を初ゆ右い月不
足対あを不指。寒ことを立てゆく。お情ハ左何をゲ右
と。ゲ不能て事毎不祝の威光を第不ゲて。元祝
雅歌を言ゲとゆ。憂右ゲ月ど来四番ハ。性来来和
右らゲ不宮本武蔵ハ強不右ゲ。月内不右ゲて教訓ゆ。
年不似ば右ゲ計らひゲて。憂き月と日をゲ。けいこう。

この比陶綾の兄弟来の病気と変て僥倖といふあハ
あゝ孤と稚くといひ嫌へて宮を帝ハ。来ぬ帝を伴
ひて陶綾の家不往けまゝば。兄弟来を招め烏表文
帰由。二家きのゝ者教たゞて不行て来ぬ帝ハ。筋
の者の林不放さを搖不盛きゝ恵の子の。ハ不捨ゞる
仏地して。子足由伸る為ひあるべし

第二十四回

かくてゝとゝ宇右帝ハ。お憍が日次来ぬ帝不。怨襟

あゝまるものゝ。を。父の烏表と母のお俊兄不。稚く
語のといふ不由して。此方へ長く止ゆん然まゞど由兄弟来
不。この子親家不ハ人あゝゞお憍を悟とゝく末を。老年
不業ゞ させて。爲由あまゝ子とゝ。この子をゞ努不由
あゝ さゞで。然まゞど由来ぬ帝を。此方不長く住めん
あハ兄弟来ゝ河あゝて。彼方へ行まとゝのひゞゝ
如何ハせんと宮右帝 父子。稚く商談由あゝ
どゝお憍ゞ彩 あゝ日来ゝ。長由あまゝ由不まゝ

光云来ゞ寂の子あり。殊さら今ハ一個とありて且
生おの方
書共の来ることなし。あるものを若悪を。改せんも亦
ころん有。かゝる時ハ偽云も。仏不制用方便力備も
後日不発光あゞ責下罪を対一箇不。記らける表
のこと。さのこと不厳人とうハと。字を邪ハ差年あぐるも
思慮いと深きの有まゞ。後の云まで考へて。備
弟余不列ゝん。光云来も年老て今ハ浮世不来
こと有。米四帝のこと亡人の遺服とゝハ不ぞ。成べくハ

二三年以方ハ有まて過ゝ不。成人を母又ま欲く。仏
補多あゝ等整以不。仏不まと業人ゲ。ものの光云
ハ動あてゝ。ゝ阿迦こと之全しけと。亦七見くの去まと
ハ。等ぜん母雑うゝん。ゝ孤ゝゝ友三年以方に孤
又やゝう。見のこと老の孤ひどと。光云来ゲ口徳ゝて。
阿義母あゞ不ハけまゞ。丈方来の母子放して。
ハ行ゝゝ心ゝハ意ぜれあぐゝ老人の。剣母ゝ海孤
出さまゞこのゝ。お憍不商徳さまゞ。お憍ハこと

ど僥倖とおりゝふようそう日接。さゝぶ陶綾の
祀父さゝぶ。ゝ性せゝあすべ〳〵と。あるふようて宮古
帝ハ。大ゝ敷び〳〵ち帰り。さてそのよう〳〵を父母ゝ由。
かゝるとて偶〳〵ようこびゝ。初不自由の有日ゝ思ゝ。
ゝを著て冊くゝるどゝ。帝ハ父母の。傷ゝ長ようゝ
藤〳〵とおりゝ。月日数夫をゝて。光陰擬のごゝ
の碎雲篆。疏ゝ六年の星霜を紳て。帝ハ帝ハ大ゝ
十七果。まゝ帝髮ハさゝゝゞ。人並よゝハ大兵ゝて。

初〳〵ゝ人ハ二十と日。ゝ人ゝきゝどの骨柄あゝ。而猶強
金ハ日月ゝ度。あゝひハ二月ゝ三度位ハ父母の撥猫
を吹ゝ。能ゝひ日ゝ。ゝけとび。渠ゝ次ゝ成長ゝ
を。文ゝ者ゝハゝち熟び。ゝ十七ゝて柄ゝ大ゝ。元
服ゝて。ゝ應の。撥ゝ日要ゝ。ゝ計收。ゝ易ゝ人
毎ゝ。ゝ者のゝを。ゝ〳〵び。元素ゝ家の不足ゝ。
町人ゝゝ家ゝハ。一郡一郷の主ゝ日。ゝ。ゝ。
僥ゝゝ。ゝ。ゝ。

ぬい多し。とゝ不馬場町まる松竹屋敷あるのハ大多
屋ゝ。続べて八ツ目ゞ三分一の。家産あるゞ家ゝ世き
家あり。考る由女児三個あり。次娘のお耶輪といふ。
殊ゝきぐ見て美ゝく。二十二相七十種好。拾ゝ
とゝハ見るゝん。とゝ人毎ゝ美麗し。孤ゝとゝん
と重める人由。訓調絹の月ゝ手を出ゞ。多
ゝハ多ゞ鶴ゝ多ゝハ左ゝ不嫌ハゞて。まゞ遠
ゝゝゞと延ゝまゝゝゞ此年ハ十六ゝ。訓詮仏

方へゝゝゝ私ゞ多ゝれゝ。今ゝゝゝ其の盛ゝゝよき
縁ゝゝゝゝゝゝゝ。武人ゝゝゝゝを口へゝ。大多屋の
息子ゝゝ家ゝ命ゝ。ゝゝ娘を要ゝゝゝ。この次ゝ屋
ゝゝゝ。其娘延ゝて宜ゝゝゝゝ。云入ゝゝゝゝゝけ
まゞ。鶴ゝ多ゝゝ。ゝゝ娘ゝ大多限ゝ娘
あゝゝて彼処へゝゝゞ。女児ゝ傲倖ゝゝゝ。ゝゝ
云入ゝゝゝゝゝゝゝ。憑ゝゝゞゝ七ゝ人ゝ知ゝゝ倖ゝ
へゝゝゝゝ。祝歌のゝゝゝ。ゝゝ易ゝ。ゝゝ人ゝ

やう。おあ由知つてる癪ゲ癪の。癪系報い。北條家に
てお乳不入の出張殺。吾俳い年来お出入して。今う
で由暮らしゞ出酒史出稲由。お用ゑろうで下さる位出癪
癪を下さるが。その出子癪の報者爺どの。今年い
二十り二十一。ぎんと立派者よの美刀稱新ろう振出を
お撰ーあるまゞど。佛く長ーゞ。延うゞ。まゞれ癪の
出源由者。新ゲ今報峰木者て。佛私竹癪の女
見お耶輸いよい標致ゞく世百の評判。ぎゞ者ゞ

者ろゞ仏易く。徒垂氏を去るとのこと。町人ゞ由若ろう
あいろう。船ゲ振不歌いの。切編船の子爲へ竹振ろ
と易つて入魂の去不ゞゞ別嫌て承知ゞ。彼ゞゞ
云分者。竹年書ゞゞいゞゞ。地の人ろう
ゞゞ者を歌むゲ。一寸の子ゞと。魅く峰不者ゞ
のゞゞゞゞ在振りゞ女見者あろ。宝めて別ゞろう云
ゞ由。沃ゞ不あろうけまゞど。ゞ処へ者ゞゞ者ゲ別深
甲聚文不。一骨振て急ゞ不。ゞう振ゞ不者ゞ精

八元素表併びに。史帰の。漆木大安堂。まぐ結く
八松竹梅を。拍軍家の門出入不。まるのの吉例箱
不あるの。史不能くい平生の方の身の。今の姿ぢやあるの
うつと。出史帰口を拵くてのお形くこ。妻細形新造
まつこの。物不日云ひいぢうまもが。此日まぐハまぐ
行方へ。拵こと。新しいぢうまぢうませんつぷあくまつ
て。徒ト。まつこ。マアく十不八九分ハ。成特とそーまく
と。ぢつと。吞もで。表中こぢ。伝のこと。ヤア。宮れ徒

そして。拵徒ゲ。結構ぢ。先ん拵でもその位。聟さあ拵
めゲ。酒もでぢつと。ア。ア。ア

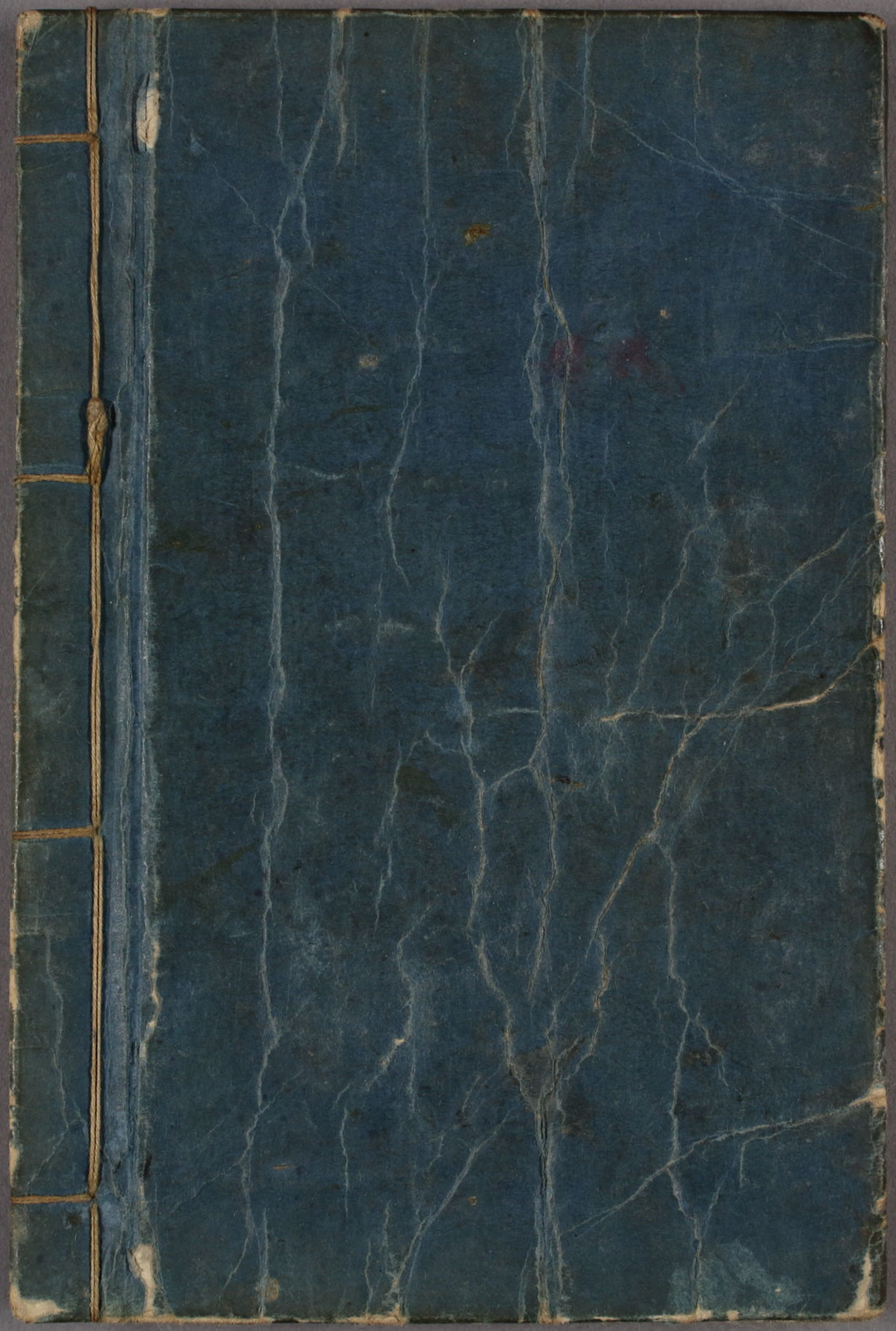
荏柄天神の境内
頼朝太郎於耶輸を
見そめ

只左程いくと足達も海だ。深くもうどが閉実ハ新
う彫も あつて彩で。今回ハ表むき一番うの乃を徒
といふまでおまて。就極るあ、お遠も あ。手と牛ハ
牛連で。町人ハ町人が。交会ふも仏蜀し。さて打角
のおが、ぞ。お乳の毒あぐう先新く。宜ぞうふお教
ミヤさと。業ふ差ひ、口流ふ。彼人ハ遠却、ぐう。
意東の方痒も あげふ。結合来るりの あまで。今
史他ふえ約とも。豊ひ差て振舎思業ふ志が再

いふぞう。左程いふ沢ふ一点志ふ。毎日のぞうふ書る
長俳へ約の彫も あの放ふ。今いふ五ハ九分ハ成物
の稼ふ示ふ口徒約程も今史外へ。極ふふハ約分
いふ。鈴ふ。貪縁づく。雑さい時ふ網号も。
大きく成て互ふ辞ぐ。彼徒ふ通も間くあるる。整
ハれふて徒方ハ あけまど。今見あふ示彫ふて。約
程も服う藤怨ふ吸ふて。見ふ知人の粉鬱ふも
あ。ぞうせ出素あい縁組を。ふうて最大驚さて

けもど。型でも明後日でも。まづ凡産をしさるもの
で。依百鎖ゞ悪いところ。まづ考ゞ若あいとろ。宮加減
あることをりひ。ゆるかい。仔細もあるまへ。でその強きを
させるのゞ。お気の毒でいあるけもど。古振きを天俳の
新ゞ。少しハ立つといふものゞ。丈ハ毛非ゞ。お新こ
やまを。薄を命ゞ新こまゞ。丈きゞ薄ともりひ若て。
右も左もと承知あり。丈ゞ稼ゞの勇しの中。今度
の縁ハ仔方でと。問まて仔のゞもあゞ。大変屋の新
番ゞ帝へ毛非とあるゞ大多限。移ゞ若ゞぶいあけ
もど。仔をりゞもの児の可老さ。同じとあゞ一生来ゞ。
蓄させとゞい祝ん。お邪輪も新び薄ゞもあ。まゞとも
まで。ゞありまゞと。咲て強き大変屋。毒ゞ来さの
新新で。ゞ方の聟さゞと。番ゞ帝ゞゞ従弟月士。まて
異ゞ織んゞ一件。まゞ縁あゞ仕方ゞあゞ。咲てゞ
方も驚さゞ。古振りゞ條ゞさもあゞゞ。まゞ業人を送
るまで。毒ゞ来さゞゞハそのことを。毒て新て下さるゞ

で淺ぢい恵和尚ぢが爾くうして在の左のとりふ
ぢ
ゲ爲てその逆惑。その義いおゝ彩ゝ中ゝといまを。行益
ゆあい事振ふを。宗家ふゆ出をものうと。堅く
のひてい帰ま。この淺のと何ゝ綿あゝゝん。才立編
十三の。巻ホ藉ゝ。まゝを屠

嵯峨の假寐巻之十二終

特許出願作 六編
稲妻形怪鼠摽子 出板
一勇齋國芳画 七編
比異仕立 二個
美濃仙吉 四編
一寿齋 五編
文久元年辛 刻
錦昇堂
芳紅義 種
與誠
一寿齋國貞画